

森部 豊著

## 『安祿山』

——「安史の乱」を起こしたソグド人——  
(世界史リブレット 人 018)

山川出版社 二〇一三・六刊  
A5 一〇四頁 八〇〇円

本書は、安祿山と彼が起こした「安史の乱」をユーラシアの歴史の動きの中で捉えなおしたものである。従来、「安史の乱」は唐宋変革の重要なターニングポイントとして中国史の枠組みの中で解釈・説明されてきた。本書では、これまで安祿山と「安史の乱」を語る上で不可欠だった玄宗皇帝と楊貴妃のラブロマンスのエピソードを省き、唐国内の描写も必要最低限とした。その代わりに従来よりも広い視野から、ユーラシア東部地域で何が起き、それが安祿山と「安史の乱」にいかに関わったのかを重点的に描くことにより、新たな解釈を見事に打ち出した。以下に、各章の内容を簡単に紹介したい。

「①安祿山の誕生とその時代背景」では、中央アジアのオアシス都市出身で商業の民として名高いソグド人と遊牧騎馬民族の突厥人との混血として安祿山が誕生した歴史的な背景に迫る。ソグド人の東方進出と突厥の盛衰の様子を概観することで、その突厥に従属するうちに騎馬遊牧民化したソグド人（ソグド系突厥）の存在を明らかとした。安祿山はこのソグド系突厥として生まれた

のである。

「②唐における安祿山」では、安祿山が七一六年ころに突厥第二可汗国内部の混乱により唐に亡命して以降、七四二年に平盧節度使に就任するまでを記す。節度使は、唐が境界地域で周辺諸民族に対応するために創設された。安祿山はその節度使となって強大な権力を握ることになる。

「③「安史の乱」前夜」では、安祿山がいかに多種多様な種族から成る安祿山軍団を形成したかを具体的に示す。安祿山は、各地のソグド商人を祆教を利用して結集させ、莫大な財力を持った。また彼は、契丹・奚の首領とは婚姻や仮父子の関係で繋がりが、さらに突厥の衰亡で唐に亡命したソグド系突厥や同羅をも取り込んだ。安祿山軍団は、モンゴリア・マンチュリアの歴史変動と密接に関係したものであった。

最終章の「④安祿山のめざした世界とその後」では、「安史の乱」の顛末を記した上で、安祿山がなぜ「反乱」を起こし失敗したのかについて、安祿山軍団と唐朝軍の構成を比較して見直す。また、安祿山や「安史の乱」が後世へ与えた多大な影響を述べ、「中央ユーラシア型国家（『征服王朝』）の先行形態であることを示す。

著者の森部豊氏は、石刻史料を積極的に利用することで、近年急速に進展するソグド人研究をリードしてきた。本書には、その緻密な考察に裏付けられた最新の研究成果が盛り込まれており、その上、一般読者にも分かりやすく記されている。

本書が発行された翌七月に、モンゴル東部から巨大な突厥碑文が発見された（二〇一三年七月一七日付の朝日新聞など各紙朝刊で報道）。

この碑文は安祿山が活躍した八世紀中頃のものと考え、当時の突厥だけでなく、唐やソグドなどを含む東部ユーラシア世界に関する重要な史料となるとみられる。このように日々解明が進む本分野の世界観を知る第一歩として、本書は最良の一冊である。

(福島 恵)